

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台4-26-8 tel & fax043-461-7004

☆

☆ 「クリスマス&忘年会」に参加して

☆☆

☆☆ ある特別養護老人ホームにて ☆☆

☆☆

☆

仲間とある特養へ月1回のボランティアに行くようになって、10年近く経つ。最初はどこにでもある4人部屋が中心の施設だった。ところが施設長が変わった途端、目に見えて施設が変わっていった。部屋ごとに掛けられた暖簾やベッド周りのカーテン、廊下の壁の飾り等が殺風景だった所をアットホームな生活空間に変えた。食堂は食器棚等の家具で数人の空間に間仕切りされ、時にはテーブルクロスを掛けて、食べる楽しさを演出している。介護報酬が引き下げられ、経営は苦しいと思われるが、行くたびに新しい工夫を発見する。

施設の運営基準には「教養娯楽設備等を備えるほか適宜入所者のためのレクリエーション行事を行わなければならない」とある。サービス精神に富んだこの施設の行事は楽しい。夏祭りも夜店あり花火ありで満喫できるが、クリスマスは私たちボランティアも赤い服を着、トナカイなどの髪飾りを付けて、雰囲気盛り上げ、一緒に楽しむ。今年はラーメン担当で200人分以上を作った。おにぎり、うどん、ラーメン、ローストチキン、から揚げ。コロケ、プチケーキ、ドリンク等模擬店が並び、準備がすべて整った店に何組ものボランティアが配置され、楽しく作業をした。味が心配で皆で試食したラーメンは、麺といいスープといい、とても美味しく、自分達で驚いてしまった。甘酒、ぜんざい、おでん、フルーツ、ケーキ等を堪能し、お腹が一杯になった頃、1階ロビーではフラダンス、ソーラン踊り、三味線等の実演に続き「もちつき大会」とプログラムの番号による福引抽選会があった。1等はデズニーランドの入場券で6等まで沢山の賞品があった。最後になっても参加者の人数は余り減らず、入居者、家族、職員、ボランティア、近隣の住民等150人以上が抽選会に一喜一憂。

普段、家族の訪問者に会うことは余り無いが、イベントの時は良く似た顔の親族と楽しそうに談笑する入居者の姿を多く見る事ができる。今回も皆笑顔一杯でほほえましかった。3度も衣装替えをし、ミニスカートのサンタクロースにもなった施設長さんをはじめとする職員の働きには頭が下がる思いである。いつもの仕事に加え、準備・あと片付けと休む暇もないだろう。来年は「もっと助けになるボランティアになろう」と、心の中で誓って帰途についた。

(K)

成田に近代文学館分館が完成、ご存知でしたか

2007年秋、成田の駒井野に日本近代文学館分館が完成した。土曜日だけの開館なので、私はまだ出かけてはいない。ただ、オープン記念の「近代文学の至宝 永遠のいのちを刻む」展が成田山書道美術館で開催されていたので出かけてみた。

成田山新勝寺の参道を抜けると美術館がある。今回の展示は、1962年近代文学館創立以来、収集してきた125万点に及ぶ資料の中から、文学者直筆の生原稿、書簡、書画などの名品をあつめている。

「呼子と口笛」ノート

最初の「至宝中の至宝」には、樋口一葉「たけくらべ」、漱石「明暗」、多喜二「蟹工船」、太宰治「人間失格」など13点が別置されている。私にはどれも初めての逸品であるが、目を見張ったのは、石川啄木「呼子と口笛」ノート（土岐善麿寄贈）の、1911年6月15日付の詩稿「はてしなき議論の後」「ココアのひと匙」であった。ノートというよりは横罫の便箋のような紙に、端正な字で清書され、自筆の表紙絵と詩集名のレタリング、挿絵のデザインも色も、詩稿の内容に反して、むしろ明るく若々しく思え、その丹念な筆づかいが伝わってくるようだ。これらは『創作』の7月号に発表されたが、死後1913年、友人土岐善麿の手により『啄木遺稿』に収録されている。「ココアのひと匙」は次のように結ばれている。

はてしなき議論の後の／ 冷めたるココアのひと匙を啜りて、
そのうすにがき舌触りに、／われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

やや、なまなましい・・・

「和歌革新の港」というコーナーは、「明治生まれの近代歌人の仕事と日常を偲ばせる品々」を集めたという。総花的過ぎた感があったのだが、晶子が、夫寛の渡航費用捻出のため書いたという「百首屏風」、「＜不安＞の文学」コーナーの「斎藤茂吉が芥川龍之介に与えた処方箋」、1936年の永井ふさ子宛の斎藤茂吉書簡（持参便）などが、妙に生々しかったし、興味深いものがあった。

成田ゆかりの文学者のコーナーでは

今回の展示会の「ご当地」付録のような存在だが、展示は詩人・歌人・小説家として活躍した水野葉舟（1883－1947）に絞り、彼の生き方や交友関係を探る。投稿少年はやがて『明星』の鉄幹に拠り、詩や短歌を発表した。窪田空穂、高村光太郎を生涯の友とし、彼の小説・小品などは当時の若者たちに人気が高かったという。関東大震災後1924年に成田郊外の駒井野の開墾地に入り、地域の青年や教師らの指導にあたり、地方文化の向上に貢献した。印旛郡の木下小学校、船穂小学校の校歌なども作詞する。政治家となった次男水野清を継いでいるのは孫養子水野賢一（中尾栄一次男）である。三里塚記念公園には葉舟の「我はもよ野にみそぎすとしもふさのあら牧に来て土を耕す」の歌碑があるという。見終わったとき、どっと会場に押し寄せてきた中学生たち、名札には成田中学校とある。帰り道、成田中学で教職にあった鈴木三重吉の碑「古巣はさびても小鳥はかよふ 昔忘れめ屋根の下」を写真におさめた。（UM）

菅沼正子の映画招待席 25

潜水服は蝶の夢を見る

—左目のまばたきだけで自伝を書き上げたすごい人—

これは実話である。信じられないけれど確かに実話なのだ。脳梗塞で突然障害者になってしまったファッション誌「ELLE」のフランス版編集長ジャン＝ドミニク・ポビー氏の実話なのだ。ジャン＝ドの愛称で呼ばれる彼は、42歳のとき脳梗塞でたおれ、生死をさまよったすえ昏睡からめざめてみたら、全身が麻痺、言葉すら発せられなくなっていた。けれど、唯一自由に動く左目のまばたきだけで、この映画の原作となった自伝を書き上げたというもの。世の中にはすごい人がいるもんだ。

オープニングのBGMはシャルル・トレネの歌うシャンソンの名曲<ラ・メール>。ラ・メールは海。うまい選曲。母なる海を思わせる心やさしい歌で、私の好きな歌だけれど、映し出される映像はマスクにゴム手袋の医師、鋭利なメス、レントゲン写真など緊迫の手術室。映像が病室にかわってジャン＝ド（マチュー・アマルリック）が意識をとりもどす。医師に告げられた病名は「ロックト・イン・シンドローム（閉じこめられ症候群）」。それって、何んだい？……尋ねようとしたが、声も言葉もでない。全身が動かない。潜水服をまとったままのような、そんな感じなのだ。意識ははっきりしているのに、それを伝えることが全くできない。

医師は右目の瞳孔に悪影響を与えないためにとの配慮からか、無謀にも右目の両まぶたを縫いつけてしまう。「やめてくれ！」ジャン＝ドの叫びは届かない。ここで私の頭をよぎるのは「ジョニーは戦場へ行った」。71年作の反戦映画の名作。戦場でジョニーは九死に一生を得たものの手足を失ってダルマ状態。それでも自分の意志を伝えるため頭部でモルス信号を発すると、医師たちはジョニーを鎮めるため麻酔薬を打つ。「やめてくれ」……ジョニーの必死の思いもむなしく、意志は伝えられないまま。あの映画の号泣を私はまだ忘れてはいないが、こちらの映画はおしゃれの発信地「エル」の編集長で、フランス映画だ、ユーモアとウイットで重い題材を見すえていく。

ジャン＝ドは信じられないこの現実には初めは「死にたい」とも思った。見舞客を心のフレームからのぞくと、じつに面白いではないか。その人の人間性が見えて想像力が無限に広がる。楽しかった過去、つかめなかったチャンス、逃がした幸福、さまざまなきっかけがしつかりよみがえってくる。蝶の羽音さえ聞こえる。「たとえ体の自由を失っても、想像力と記憶は蝶のように自由にはばたく」ことに気づいたジャン＝ドは、言語療法士の後押しと協力で、魂の記録をつづっていく。伝えたい単語の文字を一文ずつまばたきで選び、文章にしていくという途方もない根気のいる作業。ただただ感嘆するばかりだ。

ジャン＝ドの視線で見たカメラワークは、ぼやけたり、ゆがんだりの工夫をこらして名カメラマン、ヤヌス・カミンスキーはカンヌ映画祭で高等技術賞受賞。映像美豊かなジュリアン・シュナーベルも監督賞受賞。（1月下旬より公開予定）

あなたの思い出の喫茶店は一昭和は遠くなりにはけり（1）

銀座「ルノアール」からコピー機が消えていた！

昨年末、小さな集まりが銀座6丁目ルノアールのマイ・ルームで開かれた。出席者の数を確かめてから、店内でA4一枚のコピーを取るつもりだった。一階に降りてコピー機を探すが、「なくなりました。近くにコンビニがありますから」とのこと。ルノアールは、「喫茶室」と銘打って、ゆったりと、しずかに話せる雰囲気のお店で、商談などにも利用されて、店内のコピー機が“売り”だったのに！

「談話室滝沢」が閉店していたなんて！

昨春、同窓会の二次会で池袋東口の「談話室滝沢」を探したのだが見つからないことがあった。最近、「滝沢」は2005年3月、なんと全店閉店していたことを知った。池袋店と新宿店は、銀座の花椿通り「椿屋珈琲店」の経営になっているという。銀座の「椿屋珈琲店」には、先日も買い物帰りに、連れ合いと寄った。格調高い、落ち着いた店なのだが、池袋も新宿もまだ新しくなってからは訪ねるチャンスがない。新宿の「滝沢」は、1970年代、まだ知り合ったばかりの連れ合いと入ったことがある。当時の店内には、琴の音が流れ、足元の流水と飛び石が印象的だったことなどが思い出される。「滝沢」の店内はあくまで明るく、ウェイターやウェイトレスはアルバイトでなく、全員が社員で徹底した接客教育がなされているという評判だった。当時は、うっかり知らない店に入ると、暗い照明の、仕切りの高い「同伴喫茶」なる店が結構多かったのである。いずれも、いまやスタバやドトールに押されてしまったのだろう。

道玄坂の「カスミ」はどうなっていたか？

大学の文化サークルで、都内の大学の横断的な集まりがあつて、もはや風前の灯であつたのだが、参加者といえば私たちの大学と国学院、二松学舎の数人が細々と集まる程度だった。渋谷道玄坂の「カスミ」を何度か使っていた記憶がある。さっそく、ネット上で調べてみると、その「カスミ」も、暖簾分けの「CASUMI」（元住吉）のホームページによれば、1983年には閉店したというではないか。

「田中屋」か「ボストン」か一目白界隈のスイーツは？

大学卒業後、職場は目白にあつた。界隈の喫茶店といえば「田中屋」なのだが、「ボストン」のケーキにはファンが多かった。数年前、目白に用があつて、通り道に「田中屋」を探したのだが、見つからなかった。思い出して、ネットで調べてみると、喫茶店「田中屋」はすでに10年も前に閉店し、同じ場所のビルの地下1階に、今は「目白田中屋」という洋酒専門店になっていることがわかった。品揃えでも一目おかれていた店とのこと、ワインの一本でも買いに行こうか。

こうしてみると、1970年代、わが青春の軌跡の一つでもあつた思い出の喫茶店、その多くは消えていた。「昭和は遠くなりにはけり」のさびしさは拭いきれない。（続く）

編集後記一少し遅れましたが、新年の発行にこぎつけました。今年もどうぞよろしく。